

八重洲無線黎明期のリグたち

八重洲無線は、HF帯でもまだAMが全盛の時代にSSBモードの製品に力を入れ、トランシーバや送信機、受信機にも初期の製品からSSBモードが装備されていました。そんな八重洲無線の黎明期を飾った製品群をまず検証してみます。

見本

業務機の通信機メーカーとして産声を上げ、まだ『ゼネラルテレビサービス』という社名だった八重洲無線は、1960年のはじめに初のアマチュア無線用機器としてA型SSBジェネレータ・キット(写真1)を発売しました。クリスタル・フィルタ式の製品で4,400円。このキットは同社初のアマチュア無線家向け製品となります。

1962年には初のSSB送信機、FL-20を発売しました。これは3.5MHz～28MHz帯をすべてカバーする送信機で、SSB/CWは10W、AMは2.5Wの出力、価格は49,800円でしたが、局発水晶は未実装でバンド水晶は一つしか入っていませんので、実際にオン・エアする場合はさらに追加投資が必要でした。2MHzのクリスタル・フィルタを使用するのが特徴です。

また1963年にはFL-1040というちょっと奇妙な型番のリグも発売されました。このリグは7MHz帯のモノ・バンダーで、CWは40W、SSBは10Wの29,500円(VOX付きは32,500円)という価格でしたが、価格が安いことと、10WでAMも出せることから、当時としてはかなりの数が販売されたようです。

アマチュア無線向け製品拡大へ

この後、八重洲無線はいろいろな送信機を発売します(表1)。

FL-20の電源トランスを交換して輸出できるようにしたのがFL-20A(前期型)で、それを50W出力(100W入力)に増力してVOXを付けたFL-100もありました。これらはFL-20同様VXOを持たないため、外付けVFOがないと固定チャンネルでしか出られませんでした。

また、FL-20(A)やFL-100を改良したのがFL-20A(後期型)とFL-100Aで、ほぼ同時に発売されたFL-20B、FL-100BからVFO、VXO、ハイバンドの局発水晶を抜いた製品です。FL-20A、FL-100Aの最終型にはLOADバリコンが追加されています。後期型以後は広告にFL-20B、FL-100Bと同一シャーシというPR文句がありましたから、“B”シリーズの廉価版という位置付けだったようです(写真2)。

さて、その高級機(?)のFL-20B、FL-100Bは当時としては最高級の回路と価格を誇っていました。とくにFL-100Bの評価は高く、マイナー・チェンジされてメイン・ダイヤルにサブ目盛りが付き1kHz直読となったタイプは、八重洲無線初の受信機FR-100Bと組み合わせ、当時の最先端のリグとして海外でも高く評価され

表1 八重洲無線黎明期に発売された製品

発売年	型名	価格(円)	備考	発売年	型名	価格(円)	備考
1962年	FL-20	49,800		1964年	FL-100B	75,000	
1963年	FL-10/40	29,500	VOX付きは3,000円高。10W仕様は500円安		FL-20A	49,800	これは後期型
	FL-20A	49,800	これは前期型。パネルはFL-20と表記		FL-100A	59,000	
	FL-100	68,000		1965年	FR-100B	56,000	デラックスは62,800円
	FL-20C	49,800	本文参照、幻のリグ?		FL-200B	77,000	1966年より79,500円
1964年	FL-100C	65,000	本文参照、幻のリグ?	1967年	FL-50	36,500	
	FL-20B	56,800	すぐに65,000円に変更		FR-50	33,000	
					FT-50	58,000	
					FT-100	11,800	DC電源キット付き

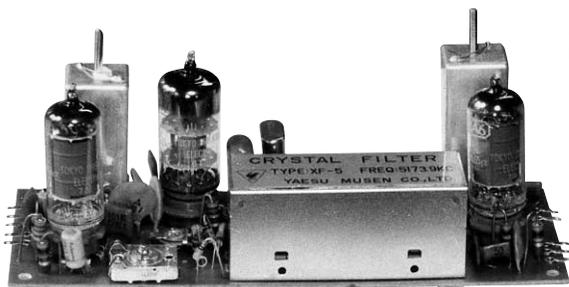


写真1 A型SSBジェネレータ・キット



写真2 FL-100Bの外観

(「CQ ham radio (CQ出版社)1964年3月号より)

ました。当時の海外誌のあちらこちらに“F-LINE”という記述が見られます。

このシリーズには100W出力(200W入力)のFL-200Bも追加され、トランシーブ操作が可能な送受信機として、完成度は高いながらも唯一の受信機だったFR-100BとFL-20B, FL-100B, FL-200Bのいずれかを組み合わせる形でこのラインナップは販売されました。

完成度もアップしベストセラー機も登場

1967年になるとFL-50, FR-50の送受信機が発表されます。このリグは、送信は5MHzのクリスタル・フィルタを用いたシングル・コンバージョン、受信は455kHzのメカニカル・フィルタを用いたダブル・コンバージョンです。思い切った回路構成を取ったことから安価でSSBが出せるという点は良かったのですが、VFOの安定度には少々難がありました。しかし価格対性能比はすばらしかったので、マイナー・チェンジ版のFL-50B, FR-50Bはベストセラーとなります。

1967年には他にも2機種、忘れてはならないリグが発表されています。

一つは1967年3月発売のFT-50で、真空管機ながら移動用に作られたオール・バンド機です。FL-50用と同じVFOが使用でき、DC運用も考慮されていました。このリグは1971年頃まで生産されましたが、パネル面を見るだけで誰でも初期型、後期型の区別ができます。型番がテンプレートで書いたような直線的な文字で書かれているのが初期型です。

もう一つは1967年4月発売のFT-100です。FT-100は主要信号系にゲルマニウム・トランジスタ2SA246と2SA239, 2SA93を使用したやはり移動を考慮したリグで、設計はFTDX100を経て名機FT-101へと受け継がれます。

さて、このような黎明期に、悲しい運命をたどったリグが一つだけありました。それはST-200(FTではない: 写真3)です。

1968年10月に発表されたST-200は定価29,900円のVXO式の10Wオール・バンドSSB送信機で、なぜそのコンセプトも価格帯も見事に前年発売したFL-50に被ってしまっています。

販売面を考えるとちょっとおかしな開発手順となっているのですが、この送信機はスターで開発され、スターを八重洲無線が吸収したときに開発中のこの送信機も引き取ったというのが真相ではないかと推察されます。

実はST-200よりも少し前に受信機SR-200が発表されていますが、これは“STAR”ブランドで、発売直後の八重洲無線の広告でもSTARのロゴを付けたSR-200, SP-22とYAESUのロゴを付けたST-200が並んだ写真が掲載されていました。

なお、この“200”ラインは送受信機のトランシーブ動作(周波数連動)ができないというSSB機としては致